

内水研通信

第11号 平成20年 10月

千葉県水産総合研究センター 内水面水産研究所

〒285-0866 佐倉市臼井台 1390

TEL 043-461-2288 FAX 043-460-1340

職場体験学習とインターンシップについて

内水面研究所では、中・高・大学生たちの就業体験の場として、数年前より受け入れてきましたが、今年度も地元佐倉市や都内足立区の中学校生、県内の専門学校生が様々な作業に従事しました。



放流用アユの標識用ヒレカット作業

中学生たちにとっては、職場で実際に働く経験を通して、職業観や将来への展望を養うことを目的とした職場体験学習の一環になります。

水産研究の仕事に就きたい

7月8日、東京都足立区立第十中学校3年生の吉田盛人さん、藤崎拓吾さんの2名が業務を体験しました。

当日の仕事内容は、午前中に一般見学者向けの展示室内の水槽掃除、ウナギの耳石採取（年齢を調べます）。昼食を挟んで、放流用アユの鰭カット（追跡調査するための目印です）、採集魚介類の測定作業等、さまざまな作業を実際に行いました。

最初は緊張し動きの硬かった彼らも、仕事の内容を理解すると手際よく動けるようになり、耳石の採取では生命の不思議さに関心したりと、魚の好きな吉田さん、藤崎さんにとっては貴重な経験を積んだ1日となりました。

後日頂戴したお礼の手紙には、「将来こういう仕事に就くため、今後努力していきます」との力強い言葉が踊っていました。遠く離れた地域の職場を指名してきたことから気持ちの強さを感じました、夢の実現に向けて頑張ってください。

魚の養殖に取り組んでみたい

7月30日、佐倉市立臼井中学校2年生の勝山翔太さん、信澤颯太さん、鈴木淳介さんの3名が業務体験しています。

前回（足立区立中学生）の様々な作業内容に加えて、今回は「養殖研究」を希望している勝山さん、信澤さんのために、日常的なアユの飼育作業として、pH（水素イオン濃度）やDO（溶存酸素量）といった水質測定、餌の作り方や給餌方法、成長具合を調べるために一部サンプル



採集物のソーティング作業

リングした個体の、魚体測定等（これらは、日常の魚の健康状態を知り、次回以降の給餌量を決定する上でも重要な項目となります）を実施しました。

中学生としての時期は、将来をまだおぼろげながらのイメージでしか捉えられないと思います。当研究所で今回経験した内容が、各々の明確な目標に向かう一助になってくれればと思います。また今後は、自分で考えたり調べたりする習慣を身に付けることが研究者としての第一歩となります。

今回の経験を将来に繋げたい

8月18日～29日には千葉県庁インターンシップ実習生として、（独）国立高等専門学校機構木更津工業高等専門学校生の、牧広樹さん、村井渉さん（いずれも、環境都市工学科）が実務経験しています。



ウナギからの耳石採取作業

二人にとってインターンシップは学外実習として単位取得の対象となることから、2週間で延べ70時間に渡る実務作業は大変貴重な時間です。

1．手賀沼や手繰川（印旛沼支流）で張網等により採捕された魚介類の分類や測定（魚介類分布調査）。

2．ウナギの外部形態の測定や、耳石・脳下垂体の摘出（ウナギ種苗生産技術開発試験）。

3．成果発表（手繰川調査から）

これら、3課題についての実習内容は1日の作業終了後に日誌として、反省や感想、疑問点等を綴り、担当職員がコメントを返す形で、その日の行動を整理し次の実習に備えました。

「就業体験はここしかない！」と、タナゴやメダカを実際に飼育している牧さん、自分の住んでいる身近な自然から魚に興味を持つようになった村井さん。初日、2日目には膨大なサンプルの同定や測定にとまどい、なかなか進まない作業にあせりやもどかしさ等を感じての失敗も見受けられましたが、作業に慣れてくるとともにチームワークを発揮するようになり、後半には貴重な戦力の一人として数えられるまでになりました。

最終日、今回の実習の成果報告会として、手繰川での魚介類調査で得られたデータを基に、西沼（印旛沼）と比較検証しました。

人前での発表は二人にとって初めての経験でしたが、餌となるプランクトンや水量の増減、地質や漁法の違いにより魚類相に明らかな違いがあるとの内容を、職員も熱心に聞き入っていました。

終了前日の、丸1日だけの慌ただしい中での資料作成でしたが、発表資料の出来映えには担当職員も驚くほどでした。

社会を開く扉は中学生たちに比べ、間近に迫っていることから研修態度も真摯で真剣そのものでした。今回の経験が自信となり、二人の将来に少なからず影響を与えたのでは？

また、何かを掴みとったそんな感触を二人に感じました。

刈谷堰魚道が改修されました

清澄山系に源を発し、いすみ市で太平洋に注ぐ夷隅川には河口から約 12km の地点に苅谷堰（かりやぜき）という堰があります（詳しい位置については本ホームページ「ちばの魚道」をご覧ください）。

この堰には魚が上流へ上るための魚道がつけられていたのですが、魚道の勾配が急であることや、水の量が多いときには、流れが速くなりすぎるため、魚たちが魚道を上ることが困難でした。内水面水産研究所では、堰の管理者と堰の運用法についての話し合いや、魚道の改修をするに当たってはどのような魚道にすればよいかなど、いろいろな取り組みを行ってきました。その結果、今年 3 月に待望の新しい魚道が完成しました。



右が改修された魚道



魚道で捕獲されたサンプル

勾配が緩やかになり、魚たちにやさしい魚道

新しい魚道は以前の魚道と比べると勾配が緩やかになり（下表新旧表参照）魚が上りやすくなりました。7月に実際に魚道を魚が利用しているかを調査したところ、アユ、ギンブナ、スゴモロコ、ニゴイ、オイカワなどが魚道を利用していることがわかりました。

夷隅川には河口から 6 km ほどのところにもう一つ「潮止堰（しおどめせき）」という堰がありますが、その堰も魚道がうまく機能していません。内水面水産研究所では今後とも堰の管理者などと連携して魚介類が自由に川を泳げるような豊かな川を目指していき

いと思っています。

刈谷堰新旧表

	改 修 前	改 修 後
種 類	階 段 式	ハッチャケット式
魚 道 長	1 5 m	3 6 . 4 m
魚 道 幅	2 m	1 . 1 m
階 段 数	9 段	2 4 段
魚 道 勾 配	1 8 %	7 %
1 段の段差	0 . 3 m	0 . 1 m